があるが、愚かな者はやみの中を歩く。しかし、みな、同じ結末に行き着くことを私は知った。

事実、知恵ある者も愚かな者も、いつまでも記憶されることはない。日がたつと、いっさいは忘れられてしまう。知恵ある者も愚かな者とともに死んでいなくなる。

人には、食べたり飲んだりし、自分の労苦に満足を見いだすよりほかに、何も良いことがない。これもまた、神の御手によることがわかった。実に、神から離れて、だれが食べ、だれが楽しむことができようか。

（伝道者　2・1～3、10～11、13～14、16、24～25）

そんな絶望の中、信仰とはまったく関わりがないと思っていた妻の真希が、キリスト集会のベックさんと会う機会が与えられ、一瞬にしてイエス様を信じるものへと変えられました。クリスチャンの両親を持つ自分とは違い、まったく未信者の家庭で育ち、信仰は弱い人のすがるものだと思っていた妻が一瞬にして救われました。妻は二十三歳のときに亡くした母親と天国で再会できることを知り、解放されて大喜びで家に戻ってきました。そのとき、聖書のみことばが記されているカードをたくさん持って帰ってきましたが、その一枚が絶望していた自分の目に飛び込んできました。

恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。

（ダニエル　10・12）

全知全能の神様が存在すること、その神様の前において自分は小さく無力な存在であること、そして神様は遠い昔から、自分を見守って愛してくださっているという事実が真っ暗闇の心に光として差し込みました。その瞬間、感じたことのない喜びに満たされて涙が止まりませんでした。二〇〇四年七月十八日、奇しくも二十年前に真希の母親が昇天したのと同じ日に、結婚式を挙げることになりました。当時、夫婦で救われたことを喜んでいましたが、まだ主にある結婚という意味がわかっておらず、自分たちの結婚式なのだから好きにしたいという思いがあり、御代田の福音センターで結婚式を挙げることには抵抗感がありました。しかし、「聖書にある通り、岩の土台の上に家を建てて欲しい」との両親の強い要請により、御代田で結婚式を挙げることになりました。このみことばの意味は、その後に起こる大きな試練を通ったときに理解することができました。

だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。

（マタイ　7・24～25）

二〇〇五年に勤めていた会社を辞めてロサンゼルスを離れ、神戸で両親が経営する会社を真希と一緒に手伝うことになりました。仕事も、集会も一緒、且つ住居も近くに構えたこともあり、毎日のように縦横斜めで親子、上司部下、集会の兄弟姉妹、嫁姑と喧嘩が絶えない日々が始まりました。同じ信仰を持っているから何も心配ないと安易に考えていましたが、結果は惨憺（さんたん）たるものでした。一年経ったとき、「自分たちは引退して、仕事を任せたいと言ったから、安定した前職を辞めて神戸に来たのに約束が違う、ひどい仕打ちだ」と両親に言い放ち、すぐに夫婦で荷物をまとめて神戸を去りました。両親とは一生連絡を取らない決心をして絶縁状態となりました。集会からも完全に離れました。集会に集わなくても、夫

婦で祈って信仰を保てば大丈夫だと思っていました。

二〇一二年からシンガポールに移住し、新しい仕事が軌道に乗ったと思ったとき、もう信仰から離れ、自分の思うままに歩んでいました。シンガポールに移住した直後の二〇一二年四月二十六日、妻の父が胃ガンで亡くなりました。一時帰国して、末期ガンに苦しむ義父を妻、義妹の江里子の三人で看取りました。イエス様から離れていた我々夫婦にとって死は終わりを意味し、まったく希望のない絶望の瞬間でした。そして、その頃から死ぬ前に自分のやりたいことをやらなくてはという思いが益々強くなり、自分勝手な生活は加速して姦淫の罪を繰り返しました。そして二〇一三年六月、その事実が明るみになりました。義父が亡くなった翌年の出来事で、夫婦は壊滅的な状態に陥りました。夫婦でふらふらになりながら向かった先は、七年前の記憶をたどって、妻の実家近くに住んでいたキリスト集会のご兄姉の家でした。

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

（ヤコブ　4・4）

今度は神様も赦されないだろうと思いました。何度も赦されるのであれば、何のための信仰なのかとも思いました。絶望しました。言い知れぬ孤独感、虚無感に押しつぶされるような感覚に陥り、何のために生きているのかと真っ暗闇の中でさ迷っていました。

主は、あわれみ深く、情け深い。怒るのにおそく、恵み豊かである。主は、絶えず争ってはおられない。いつまでも、怒ってはおられない。私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。

天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。

父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。

（詩篇　103・8～14）

「それは直りませんね。周作さんのその罪の性質は」と集会のある兄弟から言われました。それでは何のための信仰なのかと当惑しましたが、すぐにその兄弟の取り次ぎで、シンガポールに別の兄弟が出張で来られて会うことになりました。まったく面識は無かったのですが、ホテルのロビーでお会いした瞬間に、集会の方だとわかりました。真っ暗闇にいる自分に取って眩（まぶ）しい光でした。その兄弟が日曜学校の先生を昔からされていると聞き、何の抵抗もなく自分の心の内を話すことができました。「御霊の喜びは肉の喜びに圧倒的に勝っている」と力強く言われたとき、自分の力では禁欲的な生活はできないが、肉の欲に圧倒的に勝る朽ちない喜びということは自然に理解できました。そのとき、心の中が静けさと喜びで満ち溢れました。

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。

（ガラテヤ　5・16～18）

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからない

のですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

（ローマ　8・26）

両親との関係では、会いたくないという気持ちがありました。しかし、我々の問題を聞き付けた両親は、御代田の福音センターに駆けつけて来て、福音センターの礼拝堂にいた妻と自分を見つけるなり走りよって、「愛のない親でごめんね」とボロボロの二人を抱きしめてくれました。一生会うまい、と思っていた両親との七年ぶりの再会でした。そして自分がちりあくたにすぎないこと、いずれ死んで肉体は滅びること、肉ではまったく良いことをしないこと、誰に対しても責めることができない罪人であることを示され、両親に対する赦せないという気持ちは主によって取り去られました。

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

（詩篇　51・17）

一連の問題自体は段階を経て大きな問題へと発展していき、自分では解決できないことを示されました。しかし、主にすべてを委ねることは、自分勝手に解釈する義、世間一般の見方、ヒューマニズムなどが邪魔をしてできませんでした。神様へ委ねると言って何もしないのは無責任であるように思え、また何もしないことによって問題が更に悪化するのではないかという恐れがありました。しかし、主は徹底的に働かれ、自分の握り締めていた仕事や友人関係など、この世の様々なものを手放す覚悟を我々夫婦に求められました。主によって一つの夫婦とされた二人が、心を一つに合わせて祈り、すべてを主に明け渡す必要があった瞬間でした。

この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。

（2歴代誌　20・17）

ユダの人々は全員主の前に立っていた。彼らの幼子たち、妻たち、子どもたちも共にいた。

（2歴代誌　20・13）

主イエス様の十字架上での御業がなければ、また主イエス様と出会わなければ、地上において、虚しい希望のない人生であるだけではなく、死後に裁かれる罪人でした。しかし、主イエス様と出会い、罪と死の奴隷から解放されて、この世のすべてに勝る、圧倒的な喜びを体験的に知りました。

そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。

（ヨハネ　8・32）

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

（ヘブル　2・14～15）

一部始終を間近で見ていた義妹の江里子は、主の御業を確かに見ることになり、その直後に救われました。夫婦関係、親子関係の修復、そして義妹の救いはまったく想像しない結末であり主の栄光でした。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。――主の御告げ。――天が地よりも高いように、わたしの道は、あな

8人の証し

Unser HERR lebt

たがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。（イザヤ　55・8～9）

ペテロとヨハネは午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。すると、生まれつき足のきかない男が運ばれて来た。この男は、宮にはいる人たちから施しを求めるために、毎日「美しの門」という名の宮の門に置いてもらっていた。彼は、ペテロとヨハネが宮にはいろうとするのを見て、施しを求めた。ペテロは、ヨハネとともに、その男を見つめて、「私たちを見なさい。」と言った。男は何かもらえると思って、ふたりに目を注いだ。すると、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」と言って、彼の右手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、おどり上がってまっすぐに立ち、歩きだした。そして歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮にはいって行った。（使徒　3・1～8）

渡邊周作
一九七五年　東京生まれ。神戸市立港島小学校卒、カナディアンアカデミー中学校卒、米国Mercersburg Academy高校卒、米国コーネル大学卒。
一九九八年に伊藤忠商事入社。現在はシンガポールにて資産運用会社に勤務。
妻／真希

光よあれ

重田　洋



左から長女の唯子さん、洋さん、妻のさとみさん、長男の純一さん

人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。（詩篇　8・4）

私は、一九六一年三月に新潟県北魚沼郡小出町（現在の魚沼市）に生まれました。父・櫻井光行、母・美代、七歳年上の兄、五歳年上の姉と私の五人家族です。「洋は生まれたとき未熟児で、大きな病院で診てもらったんだけどだめで、仕方なく家に連れて帰ってきたんだけど、近くの小さな病院でほんの小さな薬をもらって飲ませたら良くなった」と、母は私にこの話を何回もしてくれました。イエス様が助けてくださったのだと思います。

父方の祖父母がクリスチャンであったため、教会の幼稚園に行き、姉に連れられて教会の日曜学校へも行きましたが、小学校三年生のとき、テレビを見ることと野球をすることに夢中になり、日曜学校へ行く

のは止めました。エチオピヤの宦官の紙芝居だけは今も覚えていますが、心の目でイエス様を見上げることはありませんでした。高校を卒業するまでの私にとって一番大切なことはスポーツをすることでした。

高校を卒業した日のことをよく覚えています。家に帰って、こたつに首まで入って、テレビで高校野球を見ながら泣いていました。ほとんど勉強しなかった私は受験に失敗し、自分はこれからどのように生きたらよいのかさっぱり分かりませんでした。自分の小ささというよりも、何もないような自分を思い知ったときでした。今、思い返すと、そのような小さな者にイエス様はいつも目を留めてくださっていたのだと思います。

高校を卒業してからの一年間は、ほとんど家でごろごろしていましたが、社会性のないことが本当に嫌になり、兄を頼って東京でアルバイトをすることにしました(最初に住んだアパートは吉祥寺の井の頭公園の直ぐ南側でした)。一番時給が高かった銀座のレストランで働きました。皿洗いが主な仕事でした。とても繁盛していたレストランで洗い物が山のように出ました。調理も少しやらせてもらえて充実感がありました。

一年ほどレストランで働いたあと、三回目の受験で大学の夜間部に合格しました。調理の仕事を続けるか、大学へ行くかで迷いましたが、兄に相談したところ「何言ってんだ、大学へ行け」と言われて方向転換することとなりました。入学金は兄が出してくれました。生活費と学費を稼ぐため、昼間は正社員として働き、ちゃんとした収入を得たいという都合のよい考えから、大学の近くの渋谷の職安へ仕事を探しにいきました。

何の技術もない者でしたが一つだけ求人が備えられており、迷うことなく、その会社に就職しました。その会社は商品取引の会社でした。商品取引所に行って、場立ちとして働く仕事でした。当時の取引所は電算化されておらず、取引はすべて人間の手の合図で行われていて、大きな金額が動く仕事にとても緊

張しました。昼間は仕事、夜は学校(学校の授業には大変励まされました)、そのあと友達とマージャンという生活が続きました。

大学四年生のとき、仕事を続けていられないという思いがこみ上げてきて、会社を辞めることにしました。理由は次の二つです。①お給料をたくさんいただいて、それを自分の欲望を満たすことに使っていること、②会社の仕組みや利害関係が分かってきたこと、でした。充実した日々を送っていたつもりでしたが、私の心の中は真っ暗でどろどろで、何の希望もなく、何もかもが嫌になりました。これらのことはイエス様が用意してくださったことであることが、あとでわかりました。

そのとき、あなたは全能者をあなたの喜びとし、神に向かってあなたの顔を上げる。あなたが神に祈れば、神はあなたに聞き、あなたは自分の誓願を果たせよう。

あなたが事を決めると、それは成り、あなたの道の上には光が輝く。

あなたが低くされると、あなたは高められたと言おう。神はへりくだる者を救われるからだ。神は罪ある者さえ救う。その人はあなたの手のきよいことによって救われる。

(ヨブ　22・26〜30)

わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。

(ヨハネ　8・12)

一九八四年七月、同じ会社の同じ部署で退職する人がもう一人いました。この方へ、別の部署で働いていた女性がキリスト集会で出していた『光よあれ』を手渡そうとしていました。あとで聞いたのですが、同じ日にもう一人退職する人がいる(私のこと)ということで、私にも声がかけられました。土曜の午後、渋

8人の証し

Unser HERR lebt

谷駅の南東側の喫茶店でその女性と会いました。喫茶店では、前週の競馬中継の録音を繰り返し流していて、女性の話はよく聞き取れませんでしたが、真剣さだけは伝わってきました。『光よあれ』を受け取りました。翌日の集会へも誘われましたが私は、「今日は送別会があるから、明日の朝は行けない」と返事をしましたが、送別会が始まるまでの少しの時間に『光よあれ』を少し読みました。

翌朝、私の足は吉祥寺キリスト集会へ向かっていました。足が向かった理由は思い出せません。今、言えることは、イエス様がこのような小さな者の心の奥底の叫び声を聞いてくださり、何も理解していない、どのように求めてよいのかもわからない者をイエス様の方向へ向けさせてくださったのだと思います。吉祥寺キリスト集会の礼拝に参加して一つだけわかったことは、皆さんが心の底から聖歌を歌っているということでした。それは本当に信じていなければできないことです。その日は集会でお昼をごちそうになり、近くの兄姉の家でおやつをいただき、重田兄姉の家で夕食をいただきました。私の人生の中で、とても大きな一日となりました。その年の十二月、何も分からない者でしたけれども、自分のために十字架にかかってくださったイエス様に従って歩みたいという思いで、洗礼の恵みにも与りました。吉祥寺キリスト集会に就職したのだとも思いました。

また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。（ピリピ　4・19）

集会に集ってしばらくしてから、イエス様が本当に赦してくださったことと永遠のいのちに与っていることを覚え、礼拝中に涙が出ました。その後、今に至るまで継続して、イエス様から恵みと訓練をいただきつつ、守りの内に集会へ集わせていただいております。

二十五歳のとき、退職時に『光よあれ』をくれた姉妹とどうしても結婚したいという思いが与えられました。この人と結婚しないと信仰が続かないという気持ち、こんな自分でも本当にいいんだろうかという気持ち、結婚したら後には引けないぞという気持ちも混ざっていました。クリスマスの日に本人の意思をまったく確認しないで「結婚してください」と伝えると、「私はイエス様と結婚するのでだめです」とのこと、一年後のクリスマスの日にもう一度トライしてみたところ、「やっぱり気持ちは変わりません」と返答されて、そのあと、自分は結婚についてこれまで一度もお祈りしていなかったということに気がつきました。お祈りが先でなければいけないことでした。それから一～二か月後の夜中に集会の別の姉妹から電話があり、「あなたはまださとみ姉妹と結婚する気はありますか?」とのこと、私は「はい。あります」とお答えしました。

結婚が決まってから二人で小出に報告に帰って、祖父母のところに挨拶に行きました。祖父母は「孫がイエス様を信じている嫁を連れてきた」と言いながら、縁側で顔を伏せてずうっと泣いていました。私たちの顔をみることもほとんどなかったと思います。私のことをずうっと祈ってくれていたことをあとで知りました。同じく二十五歳のとき、父に末期の肺がんという診断が下りました。私は父の病室へ行って『光よあれ』を読みました。父は静かに聞いていました。私が東京へ戻っている間、父は母に、「あれ読んでくれや」と何回も頼んだそうです。あれとは『光よあれ』のことです。イエス様は父の心の扉を開いてくださいました。父とお祈りすることができました。父は天国に召されました。イエス様の恵みは尽きません。父は戦時中、イエス様を信じている家に育っていたため「ヤソ」とからかわれ、それがいやで戦争に志願したと聞いたこと

8人の証し

Unser HERR lebt

があります。母は私たちの結婚を通じてイエス様に導かれ救われました。母がイエス様を心から喜ぶようにされました。

まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。（マタイ　18・3）

一九八八年に、吉祥寺集会の日曜学校（小学校六年生以下の子どもたちの集会です）に参加することになりました。それから二〇〇九年まで二十一年間、日曜学校に集うという大きな恵みに与（あずか）りました。夏のキャンプは毎年、仕事を休んでいくことができました。イエス様のお計らいでした。イエス様を大好きになることを体験的に知る機会となりました。お話の準備が大変で、集会へ向かう足取りが重く感じたこともありましたが、日曜学校は私にとってイエス様からの大きなプレゼントでした。二つの体験をご紹介いたします。

一つ目。子どもたちの前ではナアマン将軍のお話を何回もしました。子どもたちには「素直にみことばを信じましょう」と言いながら、自分の姿勢はどうもそうではないと感じていました。しかし、何回もナアマン将軍の場面のみことばを読むうちに、素直にみことばを信じることができるようになりました。預言者はナアマン将軍に「ヨルダン川で身を洗ってきよくなりなさい」と言いました。同じように、イエス様は私に「イエス様の尊い血で洋の罪を洗いきよめなさい」と十字架の上から招いてくださっているということを何年もかかって心の底から知りました。聖書のみことばを素直に信じることがどれほど大切なことであるかを知りました。

二つ目。日曜学校の夏のキャンプでのことです。日曜学校の奉仕者によって、「少年ダビデが巨人ゴリヤテを打ち負かす」劇が演じられました。その劇の最後のところが忘れられません。ダビデが石投げで投げた石がゴリヤテの額に命中し、ゴリヤテが倒れる場面でした。劇の中では本当の石を投げるわけにはいきませんので、兄弟が寝袋をかぶって、なるべく小さくなって石の代わりとなりました。少年が投げる石ですので小さかったはずですが、劇ではゴリヤテよりも大きな石となりました。そこで私はまわりの子どもたちと「あの石は大きすぎるよね」と話してしまいました。暫くして、大変なことを言ってしまったことに気がつきました。ダビデが投げた石は小さな石でしたが、神様への真っ直ぐな信仰によって投げられた石であり、神様が主の戦いに用いられた石、大きな石であることを示されました。同時に、自分の信仰の状態を知らせられました。私は、直ぐに目に見えるものが基準となってしまう者であることが分かりました。日曜学校を通してイエス様から大切なものをたくさんいただきました。

二〇一〇年からは中高生会に参加することとなり、毎週、中高生のみんなとイエス様を見上げるという大変貴重な時間が与えられています。この世の中にあって格別な時間です。中高生が引き続き主の恵みの内にありますよう、お祈りしています。

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。（ヘブル　12・1）

三十五歳のとき、それまで大変お世話になっていた重田定義兄・都代子姉から「力を合わせて、イエス様のことをもっと証しできるように、夫婦で養子になりませんか?」というご提案をいただきました。障害

となるものはなにもなく、長男と長女をあわせ四人で養子縁組し、櫻井姓から重田姓へと変わりました。

また、全国各地の集会に集うことを通して数限りない祝福をこの目で見てきました。私のこれまでの歩みを振り返るとき、イエス様が私のような者を特別に愛してくださっていると思えてなりません。イエス様は、不真実な私と共に歩んでくださるお方です。感謝です。

私たち夫婦は、結婚して十年間、喧嘩をすることがありませんでした。仲が良かったのかもしれませんがお互いに遠慮していたのだと思います。今回の原稿作成では、夫婦でお互いの原稿を読み、意見を出し合い、これまで以上の関係にイエス様が導いてくださいました。二人の子どもたちが集会に集えておりますことも感謝です。

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。（1コリント　1・9）

あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。

私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。（コロサイ　3・2〜4）

重田洋
一九六一年、新潟県生まれ
小出高校、青山学院大学文学部卒
(株)YJK Solutions勤務
妻・さとみ　長男・純一（じゅんいち）　長女・唯子（ゆいこ）

主の憐れみによって

重田　さとみ



夫の洋さんと

この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。（コロサイ　1・27）

私は一九六〇年に、北島岩雄・てる子の長女として群馬県に生まれました。妹と弟がおります。父は運転の仕事を、母は雑貨屋を営み、私たちを育ててくれました。主の救いに与ったのは十代半ばの頃でした。その少し前の中学の頃に、自分の存在の意味や生きる目的などについて思い悩むようになりました。誰にも必ず死があることも空しく思われ、真暗な心の状態を体験いたしました。高校生になったある日、クリスチャンの友人から集会の映画会に誘われ、参加したことから、集会に集うようになりました。明るく輝くクリスチャンの方々に接し、私の求めるものがここにあるのではと強くひかれました。それに反して、宗教は絶対嫌という気持ちもありました。主はそんな私を憐れんでくださり、引き寄せてくださいました。よく理解した

わけではないのに、私はみことばを丸ごと信じ、悔い改めの告白へと導かれていました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

イエス様が生きる土台となってくださり、心からの安心をいただきました。その後、進学のため上京し、吉祥寺キリスト集会に集わせていただくようになりました。今に至るまで、主のみからだの中で育んでいただいております。感謝しかありません。

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

（箴言　3・6）

このみことばと共に上京したはずが、学校の友人たちと過ごすことに心が奪われ、神にも世にも、というような中途半端な自分に信仰のなさを知りました。イエス様を悲しませているという苦しさに耐えられず、彼女たちに話して主を選ぶことができました。そのとき、詩篇のみことばを通して、私のために涙を流して祈ってくださっていたイエス様のご愛をヒシヒシと感じさせていただきました。私も涙がとめどなく流れて、二度と主を悲しませたくないと固く思ったことを覚えております。

それから少しずつ主を知れば知るほど、少しはましな者かと思っていた自分は、とんでもない醜（みにく）い者であることを知らされ、私こそが主を十字架にかけた罪人のかしらであることを教えられました。忘れていた幼い頃の記憶で、あまりかかわりのない近所のお友達に、「嫌い」という黒い心が突然飛び出し、戸惑い、ひどい行動をとったことをまざまざと思い出しました。

また、理性で抑えていることの底にある罪の思いが明らかにされたり、他の人に決して悪いことをしたくないという思いも罪の裏返しであることが分かりました。本来の自分は罪そのものなのだと次々に分からされました。ただ主の憐れみによって救っていただいたことを重ねて知るようになりました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。

（エペソ　2・8〜9）

私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。

（エペソ　1・7）

主に引き戻された私にとって、社会人になる前の春休みは特別な時となりました。主と共に社会に出るという気負いと、仕える者として整えていただきたい願いがありました。アルバイトをしながらみことばに親しむ毎日でした。そんな中、出会ったのが次のみことばでした。

もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。

（黙示録　22・3〜4）

このみことばに触れたとき、天国の祝福に圧倒される思いでした。このように約束されているのだから、天の御国だけを目指して主にお従いしていきたいと思わされました。

みこころでなければ閉ざしてくださいと祈り、主だけに頼ったつもりで就職した会社で、まず試練がありました。貿易関係と思って入ったそこは相場を扱う会

8人の証し　Unser HERR lebt

社でした。私はクリスチャンがこのような所にいてよいのかと悩み、みこころの時に導き出してくださいとすぐに祈り始めました。もっと人の知恵も使い選ぶべきだったのでは、と不信仰な思いになり心は重く沈みました。私は状況が変わると主への信頼も揺らぐ者でした。ただ、主への恐れもあり、勝手なことはせず、その時を待とうと思わされました。落ち込んだ心を主に立て直していただき、自分の仕事をし、折(おり)を見て聖書や集会の本を差し上げることに専念しました。私がなぜそこに置かれたのかが分かったのは、ずっと後になってからでした。本を差し上げた方たちの中に、後に結婚に導かれた主人が置かれていたのです。主人はその頃、その会社で働き、大学に通学していたのでした。約二年半勤めて次の導きがありました。

主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。（詩篇 103・14）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ 2・20）

社会で働く時間はもう十分です、これからは姉妹としての訓練が必要、との助言をいただき、重田定義兄・都代子姉妹との主にある生活が与えられました。主のために共に働けるような者ではありませんでしたが、約五年間にわたり、毎月の家庭集会、軽井沢でのキャンプなどで、数多くの方々が主に導かれ、救われていく、祝福と主のご栄光を近くで見させていただきました。主に仕えたいと思いながらも空回りする私に、兄姉には忍耐をしていただきました。

結婚して五年ほど経ったとき、さらに主に共に用いられるためとの導きがありました。重田兄姉を主にある両親として、夫婦ともに導かれ重田姓になりました。主人の母も私の両親も賛成してくれたことは、主がお働きくださったとしか思えません。ふがいない私どものために、重田の両親にはいつも祈っていただき感謝しております。また、主人の母、櫻井美代姉妹も、みことばと祈りを愛する姉妹です。その母からも、いつも祈っていただき感謝しております。

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。（ピリピ 3・20）

ここで結婚・家族・私の親族の救いについて書かせていただきます。主のお恵みにより一九八九年に主人、洋兄と結婚に導かれました。独身のときの私は、結婚をなるべく遠くに置きたいと考えてしまう者でした。イエス様と周りのご兄姉のお祈りのおかげで、主のみこころの確信をいただき、感謝と喜びをもって導いていただくことができました。主人と私は性質や思考も違いますのに、主の御霊によって一つとされていることが何よりも感謝です。仕事にも、主からのご用にも、全力で臨んでいる主人です。私は助け手として祈ることしかできない、欠点だらけの者で主人には申し訳ないのですが、共に主を見上げて歩んでいけることを感謝しております。主が自由にお使いになれる、空(から)の器になれますよう私たちを憐れんでくださいとお祈りしています。

与えられた二人の子ども、純一と唯子は、主が育ててくださいました。それぞれ成人し、いただいた仕事に励んでおります。二人とも集会に集わせていただいており、本当に感謝なことです。それぞれが自分の罪を知り、よりよくイエス様を知ることができますように。主を畏(おそ)れ、喜んで従っていけますように。私ども夫婦の願いです。

私は四十八歳のときに、ごく初期でしたが乳癌の手

8人の証し

Unser HERR lebt

術を二回受けました。手術もその後のことも、肉の思いでは嫌なことですが、主がすっぽりと包んでくださり、心は平安でした。その頃も一番の祈りは、子どもたちが主と出会い救われ、従っていけるようにというものでしたので、そのためかなとの期待もありました。ただイエス様が共にいて満たしてくださいました。家族も皆守られており感謝でした。

そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。（2コリント　5・9）

私の親族のうちで最初に父方の祖母、北島千代が主を信じ、二〇〇三年に天に召されました。九十二歳で召される数日前まで「日々の光」のみことばを読んでいたことを母から聞きました。次に母の妹である叔母、井上さち子が二〇〇四年に五十七歳で天に召されました。召される九ヶ月前に胃癌末期の宣告を受け、イエス様に出会い、救われ、みことばをしたい求め、驚く速さで霊的に成長していく様子を私たちは目の当たりにいたしました。叔母は親族やお友だち、同室の方々にも一人ひとりに一生懸命主を伝え、主に携（たずさ）え上げられ天に帰りました。ベック兄とのお交わりもいただき、集会で葬儀もしていただきました。思い返すたびに、主を拝せずにはおられません。

そして二〇一三年に私の父が天に召されました。その約三年前に脳梗塞で倒れ病院のベッドで過ごしていました。家族のおかげで遠くても通うことができたその期間は、私には主の特別な恵みの時でした。父は元気なころに「イエス様を信じるよ」と言ってくれていました。仏式の葬儀では私をお焼香から守ってくれるような父でした。その父の葬儀は弟が喪主となり仏式でしたが、主は憐れんでくださいました。主人の、聖書からのミニメッセージと私の証しと祈り、孫七人による

日々の歌からの天国の賛美も許されました。主を誉めたたえます。

母とは、父が倒れて間もない病室でアーメンの意味を話し、主の前に共に祈りました。「ごめんなさい。ありがとうございます。これからよろしくお願いします」の内容の祈りに母は「アーメン」と言ってくれました。母はその後、息子である弟の家族と安心して暮らしております。私や主人の祈りに「アーメン」と応えてくれ、物忘れは進んでいますが、共に家庭集会に行ったことは不思議と覚えています。主に感謝いたします。妹一家や弟一家、他の親族のことも、主のお約束を感謝して続けて祈ってまいります。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

私は、今まで主の憐れみによって良くしていただいたことがよく分かります。それに引き換え、自分がどんなに高ぶった者だったかも分かり悔い改めています。主に心から感謝し、御名を誉めたたえます。

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。（詩篇　115・1）

「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。（黙示録　22・20）

重田さとみ
一九六〇年、群馬県生まれ
沼田女子高校、東京スクールオブビジネス、東京家政学院短期大学
夫・洋（ひろし）　長男・純一（じゅんいち）　長女・唯子（ゆいこ）

8人の証し　Unser HERR lebt

ただ感謝します

池田　可代子



前列右が可代子さん、ご両親とご家族に囲まれて

イエス様のお名前を初めて知ったのは、十歳のころ、枕もとにおかれたクリスマスプレゼントのイエス様の誕生物語の絵本でした。家には仏壇、神棚、畑の隅には石の祠（ほこら）もありました。五歳のとき、生母が病死し、弟と二人、長野の北の地方、中野市の大伯母のもとで育ちました。東京で仕事をしていた父はまもなく再婚、妹が生まれ、東京と長野を年に三、四回、訪ね合う家族でした。

人の中では少々居場所を気にする子どもでしたが、自然豊かな農村地帯、毎日日暮れが惜しいほど野山を駆け回る楽しい子ども時代でした。母の葬儀のとき、父は抱えた骨箱を指して「お母さんはここにいるよ」と言いましたが、私はその箱の中に母はいないと思いました。のちのち、人は死んだらどこに行くのだろうと疑問を抱えながら、二十二歳のころ、職場の友人に誘われ教会に行きました。温かい小さな群れの中は居心地が良く、聖書の話も楽しみでした。気付かされる心の内の汚さや弱さを何とか努力で克服して、善い人になれたらと願っていました。イエス様の十字架の贖いの意味も分からないまま滴礼で受洗したのは、二十四歳の春でした。

そして二十五歳で同郷の夫とお見合いで結婚し、所沢での生活が始まりました。二〇二二年に召された夫とは三十九年間の結婚生活でした。三人の息子が与えられ、そろって食卓を囲める家族の暮らしは、子どものころからの夢がかなったはずでしたが・・・。結婚当初から「仕事第一、家庭は第二」と宣言した夫でしたが、時代は高度成長のとき、公務員の夫も例外ではなく、残業が続き、家に仕事を持ち帰ることも多く、張り切りながらも疲れてイライラした様子でした。息子たちの成長につれての悩みや相談事の話もままならず、不安や心配の中で次第に孤独を覚えていきました。ある日届いた高校の恩師の遺稿集に、先生が亡くなられる間際（まぎわ）、牧師さんに「幸せでした」と告げられたとの箇所を読み、私は「神様、私は死ぬときにありがとうも言えません。助けてください」と心の中で叫びました。

そんなころ、一九九三年、かつて同じ教会にいた姉妹から滝山の家庭集会に誘っていただきました。心の用意もないまま初対面のベックさんに平安のない家の状況を訴えていました。ベックさんは、じっと聞いてくださり、「それは不信仰だよー」とひと言だけ仰（おっしゃ）ったのです。お医者様に病気をみつけていただいた気持ちでほっとしました。食に神経質な夫を恐れて食事の仕度に気が重い私でしたが、その日の夕食は不思議なくらい軽やかな気持で準備ができました。救われたのでしょうか。それからは喜びと期待を抱いて学び会、礼拝と吉祥寺集会に集うことになりました。導かれて二十年余の間に、成人した息子たちにも、身体の弱さ、経済的問題、心の病と、それぞれに試みが与えられ、さらに夫の病をとおして、イエス様はバラバラになりそうな家族に憐れみをもって臨んでくださり、家族の秩序を建て直さ

れ、互いに心を寄せ合うようにと変えてくださいました。

私たちとしては、どうすればよいかわかりません。ただ、あなたに私たちの目を注ぐのみです。

（2歴代誌　20・12）

「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」

（ヨハネ　9・2〜3）

夫はしばしば、気落ちしている私や息子の背中を押すように集会へと運んでくれました。徐々に心も開け落ち着いてきた三男は、仕事も与えていただき祈りつつ通っています。二〇一三年春、大洗でベック兄より共に受洗の恵みにあずかりました。

夫の救い

召される二年ほど前、夫は網膜剥離で集会の兄弟の眼科でお世話になりました。そのときの看護師さんが何と、初めて行った学び会で夫の名前をお伝えし、救いを祈ってくださった姉妹でした。主の御手のうちに置かれている恵みを覚えて感謝でした。

所沢に住み始めてまもなくのころ、町内会の班当番の仕事に神社関係の用もあることに当惑していた私のために、それは切り離すようにと言ってくれた夫でしたが、それでも夫の両親の葬儀でお焼香をしない私に腹を立て、集会やイエス様に長い間、こだわりを抱いている様子でした。

気になる咳が長く続いていましたが、夫はなかなか病院に行こうとしませんでした。二〇一二年三月、倒れ込むように入院。検査の結果、すでにあちこちに転移している原発不明癌の末期ということでした。仕事の中断を余儀なくされ、病も受け入れ難く、夫は大変苦しみました。抗癌剤の効果もあがらず、いよいよ今後の選択を求められるようになってきたころ、夜、眠れなかったのでしょう。「お母さんのイエス様助けて！」とメールが届きました。

主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。

（ローマ　10・13）

祈り会の姉妹方からいただいたお便りや、みことばを読むと、夫は「祈っている、祈っているって、誰も来ねえじゃねぇか」と言うのです。どうやら兄弟姉妹のお見舞いを待っているらしいことが分かり、早速、お見舞いしていただき、兄弟姉妹方とのお交わりを喜び感謝しました。続いてベック兄姉も来てくださり、共にお祈りに導かれました。お交わりの中で夫は、何かに責めを覚えていたのでしょうか、「病気は天罰のためですか」とベック兄に尋ねましたが、「過去のことはどうでもいいよ」と言っていただき、ほっとした様子でした。

三ヶ月の病院生活の何よりの楽しみは、外泊で家に帰れることでした。居間で横になりながらインターネットの礼拝に耳を傾け、兄弟方のお祈りに合わせてアーメンと言いました。賛美で歌われていた日々の歌3番の「感謝します」の歌詞のコピーが欲しいとも言いました。何かで、もめそうになったときに、「もうやめよう。母ちゃん賛美歌でも歌ってくれ。俺は聴いて眠るから」、「いい歌だねぇ」と主に守られた恵みのひとときでした。また、病院は息子たちの職場から近く、食事を共にしたり仕事の手伝いもできたり豊かに交わる場となりました。次第に増す痛みや不安のときは、ベックさんからいただいた副作用のない薬、「恐れるな・心配するな・思い煩うな」を口にしていました。召される前日には病院の近くの姉妹方が突然見舞ってくださり、「僕のような

者のところへ」と感謝して握手していただきました。届けていただいたみことばを読みました。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。
（伝道者　3・11）

その日の午後、再びベッドに起きあがり、「このころの社会現象に家族がまきこまれないようにお願い致します。私は疲れておりますのでこれで失礼します」と祈りのような挨拶のような、それが最後の言葉でした。翌日、安らかにイエス様の御許へと召されました。六十五歳でした。

こうして、いのちの恵みを夫と共にいただき、イエス様の御許での再会を待ち望める幸いを心から感謝します。二〇一六年三月に御代田で記念会をしていただいたときの写真にベック兄が次のみことばを添えてくださいました。「突然にイエス様が、私を、何も取るに足りない私を、ただただ憐れまれてくださって、イエス様は見えないけど、大きな力に包まれ、生かされ、守られ、愛するイエス様がしてくださったこと、すべて私の証です」

イエス様が、こんな私を…、取るに足りない私を、ただただ憐れんでくださって…。目には見えないけれどイエス様の大きな力に包まれ、生かされ、守られて…。愛するイエス様が私にしてくださったこと…。そのすべてを感謝しています。

池田可代子（いけだかよこ）
一九四七年　長野県上田市生まれ、中野市育ち
夫／和收（わしゅう）　二〇一二年六月八日　召天
長男／耕佐（こうすけ）
次男／真（まこと）、次男の妻／晴美（はるみ）、
孫／碧希（たまき）、陽莉（あかり）、橙和（とうわ）
三男／寛哉（ひろや）

聖書はすべて神のみことば

小森　良隆


左から妻の志保さん、長男の直人さん、良隆さん、次男の謙人さん、お母さまの光枝さん

出生

私は一九六七年に神奈川県横浜市に生まれ、年の離れた姉二人の下の末っ子長男として甘やかされて育ちました。

実家は米菓製造会社を営み、先祖を大事にしており、毎朝、祖父母の写真が飾られた神棚に向かって手を合わせて拝まされていました。それゆえ、小さい頃から神様に対する畏怖の念がありましたが、その対象は風の神や火の神、山の神、水の神など、自然や祖先を神と崇める風習的なものだったと記憶しています。

中高一貫の男子校に入学してからは勉強よりもテニスの部活に忙しく、大学に進学してからも好きなテニスに熱中して、バブル景気の浮かれた空気のなか、まさに我が世の春とばかり学生生活を謳歌していました。

転機

社会人四年目に神戸に転勤となり、親元を離れ独り暮らしにも慣れ始めた一九九五年一月十七日に阪神・淡路大震災が起きました。突然襲ってきた大地震は、私にとってまさに青天の霹靂（へきれき）とも言うべき出来事でした。

廃墟（はいきょ）と化した光景を目の当たりにし、形あるものはすべて壊れるという現実に大きな衝撃を受けるとともに、自分がいかにちっぽけで無力な存在であるかをまざまざと思い知らされ、人生観が大きく変わるきっかけとなりました。

空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。

（伝道者　1・2〜3）

半年後に東京に戻されましたが、心の中に言いようのない空虚感、人生の虚しさや漠然とした欠乏感といったものを感じていた時期に、大学時代の同級生であった妻志保と再会し、結婚を通して吉祥寺キリスト集会へと導かれました。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

（1ペテロ　5・7）

回心

次の聖句は妻が初めて書き贈ってくれたみことばです。

こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。

（1コリント　13・13）

このみことばがきっかけとなり、聖書が伝える、いつまでも残るもの、いつまでも変らないものが知りたいと思うようになりました。

初めのうちは、彼女が信じている聖書の神様をどうにかして理解したいとの気持ちから、キリスト教の入門書や解説本を読みあさりました。しかし、聖書のみことばそのものに耳を傾けず、自分の力に頼った状態のままでは、イエス様の救いのみわざである「罪の赦し」と「永遠のいのち」の意味するところがまったく分かりませんでした。

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。

（1コリント　1・21）

したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

（ローマ　9・16）

しかし、主はそんな惨めでどうしようもない者の自我を砕いてくださり、聖書を悟らせるために私の心を開いてくださいました。

自分の思い通りにならない日々に疲れ果て、助けを求めるように降参の白旗をあげた途端、不思議と「イエス様、ごめんなさい。これからのことすべてお任せしますので、どうぞ宜しくお願いします」と幼子のような祈りをすることができました。すると、あたかも上からの啓示のごとく、頭で理解しようと努力するのでなく、聖書を丸ごと飲み込むように受け入れてみようとの思いが与えられたのです。

私が苦しみの中から主にお願いすると、主は答えてく

ださいました。私がよみの腹の中から叫ぶと、あなたは私の声を聞いてくださいました。（ヨナ　2・2）

わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。（詩篇　81・10）

聖書を読み進めるにつれ、みことばが私のうちに生きて働いてくださることによって少しずつ霊の目と耳が開かれていき、ちょうどカメラのピントがじわりと合うかのように、神様が確実に私を捉えてくださいました。

それから先は、まるで周到に計画されていたかのようにすべてが絶妙のタイミングで進み、主は私の両親にも働いてくださり、またたく間に家族ごと救い上げてくださいました。

両親の救いと結婚に導かれるまで

父は子煩悩（こぼんのう）な人でしたが、仕事のストレスを溜め込むと、酒に酔って家族にあたることがしばしばありました。そのため両親の間には喧嘩が絶えず、震災後に私が家に戻ってからも両親の不仲はひどくなる一方でした。

そんなあるとき、主は思いもかけない方法で、私たち家族に働き始められました。私が集会に集い始めたのを気にしていた母が、どんなところか一度集会を見てみたいというので、吉祥寺の日曜礼拝に一緒に行ったところ、日ごろは頑固な父が突然、自分も集会へ行くと言い出し、翌週の礼拝に父子二人で集うことになったのです。

その直後のスイス喜びの集いに夫婦で参加することになり、息子の心配をよそに、あっという間に二人とも救われました。そして、帰国後すぐの一九九七年十一月に御代田での喜びの集いに親子三人で行き、そこで父と一緒に洗礼を受ける恵みにあずかり、翌年の九月に妻との結婚へと導かれました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を引き抜くのに時がある。（伝道者　3・1〜2）

結婚式のときにベック兄が語りかけてくださった「偶然は存在しない。大切なのは『聖書は何と言っているか』だよ」との言葉が、私にとって救いの確信の土台になっています。

日曜学校の奉仕

結婚して間もなく、妻からバトンを受け取る形で日曜学校の奉仕に導かれました。聖書は初めから終わりまですべて神様の言葉であること、そしてイエス様のみことばは生きて働かれることを、日々体験させていただいております。

聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。（2テモテ　3・16）

また、毎週配られるみことばカードは、信仰の弱い私にとって神様が特別に処方してくださる薬のようなもので、子供たちの純粋な信仰を通して平安と喜びが与えられています。これからも主のご栄光が帰されますよう、兄弟姉妹とともに日曜学校の祝福を祈っていきたいです。

肉の性質

私がイエス様を信じる信仰を与えられてから今年で十八年になりますが、父親譲りの短気でわがままな生来の気質は変わっていません。怒りで心が満たされるとたちまち不機嫌になり、それが態度に表れてぶっきらぼうになる、私の中に根深く残る肉の性質です。

ヨナ書には、狭量な自分の姿がありのままに描かれ、また限りなく大きな神様の救いの愛が書き記されています。一時は心が喜びで満たされても、現実の生活に引き戻されるとすぐ自分のことばかり考え出す。そんな我が身を振り返ると、いかに自分が愛のないものであるか気づかされます。それでも、イエス様はそんな私の罪深い肉の性質をご存知で、特別に計らってくださり、神の愛が私のうちに働いてみこころに従う力を与えてくださる。私が信仰を与えられて本当によかったと感じるのはまさにこのようなときです。

すると、神はヨナに仰せられた。「このとうごまのために、あなたは当然のことのように怒るのか。」ヨナは言った。「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」

主は仰せられた。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」

（ヨナ　4・9～11）

怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。それはただ悪への道だ。

（詩篇　37・8）

終わりに

振り返ってみると、イエス様は無意味なことは一つもなさらず、今日まで愛を持って憐みのうちに導き、数え切れぬほどの恵みを用意してくださっていたことが、あとになって分かります。

そして、救われてからの信仰生活を通して、自分の知恵や努力に頼ることでなく、自我をむなしくして主の最善の計画に従って生きるのが一番良い方法であると体験的に知るようになりましたが、それも自らの意思で獲得したのではなく、神様から一方的に与えられた恵みをただ受け取っただけであることに気付かされます。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

（エペソ　2・8）

ともすれば自分の判断で的外れな方向に進んでしまいがちな、どうしようもないものですが、これからも聖書のみことばに信頼して、全能の神様にすべてお委ねして歩んでいきたいと心から願っています。

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。（箴言　16・9）

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

（箴言　3・5～6）

小森良隆
一九六七年神奈川県生まれ。立教大学経済学部卒。
会社員
妻／志保、長男／直人、次男／謙人

8人の証し

Unser HERR lebt

神の国とその義とをまず第一に求めなさい

小森　志保



右が志保さん、お母さまの櫻井道子さんと

○主の愛と十字架

私は一九六八年に生まれ、両親と妹と弟の五人家族で、武蔵野市に育ちました。

聖書との初めての出会いは、通っていた幼稚園で聞いた聖書のお話や、お祈り、賛美歌でした。幼稚園の一日はお祈りで始まり、お祈りで終わりました。クリスマスには聖誕劇を演じ、子供ながらにクリスマスの厳（おごそ）かな雰囲気を感じていました。小学校から高校まで、ミッション系の一貫校に通っていました。日曜日には学校のチャペルで礼拝があり、週一回、聖書の授業がありました。そのような環境で育った私にとって、創造主であり、全能者である神様の存在は、ごく自然であり、疑う余地はありませんでした。ただ、神様は漠然としており、遠い存在でした。

中学生の頃、学校のチャペルでの日曜礼拝がなくなり、各自で近くの教会に集うようにと学校の方針が変わりました。その頃ちょうど、母が信仰を持つようになり、吉祥寺集会に集うようになっていました。私も吉祥寺集会に集うように母から強く勧められ通ってはいましたが、親に従っていただけで心はそこにありませんでした。

ある夏に参加したバイブルキャンプでベック兄と交わっていただきました。その部屋には、「高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ 8・39）」と書かれた額が掛かっていました。なぜかこのみことばがどんどん心の中に入ってきて、神様の愛に包まれていることを感じ、不思議と嬉しい気持ちが湧き出てくる体験をしました。遠い存在であった神様がすぐ身近に感じられました。

またその頃、自分の罪も意識するようになりました。それまでは、性善説に基づいた考え方を堅く持っていて、人間も捨てたものではないと思っていました。周囲にいい人も大勢いらしたし、努力次第でいい人になれると思っていました。それに、自分もそこそこいい人だと思っていました。母は、私がごく幼い頃、別の宗教を熱心に信じており、夜寝る前子供たちに、「私は神の子、強い子良い子、なんでもできます、ああ嬉しい」と唱えさせていましたし、私もその通りだと思っていました。ところが、聖書には、はなから人間は罪人であると書いてあるのでとても抵抗があり、十字架の意味は到底わかりませんでした。

知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。

わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。あなたは知っているか。だれがその大きさを定め、だれが測りなわをその上に張ったかを。その台座は何の上にはめ込まれたか。その隅の石はだれが据えたか。

あなたはすばる座の鎖を結びつけることができる

か。オリオン座の綱を解くことができるか。あなたは十二宮をその時々にしたがって引き出すことができるか。牡牛座をその子の星とともに導くことができるか。あなたは天の法令を知っているか。地にその法則を立てることができるか。

（ヨブ　38・2、4～6、31～33）

この圧倒的なスケールのヨブ記38章を読んだ時に、自分という小さな個体の窓からの偏狭な視野が、まるでつまみあげられたかのように、主の視点に移され、そこから見る人間のあまりにちっぽけで取るに足らない存在であることに気づかされました。また、その対極にある神様という「愛」の存在が、私のことを「高価で尊い」と言ってくださり、その髪の毛の数まで数えられているというみことばに打ちのめされました。自分はなにをもって「正しい」とか「善い」とか言っていたのだろうかと恥ずかしく思いました。更には、全能の主が、人間という形にまでへりくだってくださった上に、ちっぽけで取るに足らない私の身代わりとなり十字架で死んでくださったというところまでが、一気に私の心の中にピタッとはまりました。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

（イザヤ　43・1、4）

二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。だから恐れることはありません。

（マタイ　10・29～31）

○天使の存在

その後、二十九歳で結婚に導かれ、二人の息子が与えられました。長男が中学に進学し、次男が小学校の高学年になり、やっと手がかからなくなってきたかと感じはじめた頃より現在に至るまでの三年程の間に、私の身の回りで次々といろいろなことが起こされました。

●二〇一二年十二月、義母小森光枝姉が原因不明で倒れ、翌年にかけて入院。

●二〇一三年五月、母櫻井道子姉がほぼ認知症と診断される。

●二〇一三年八月、母櫻井道子姉がベッドから転落。首の骨の骨折と頚椎損傷で入院、手術。認知症的な症状が急激に進む。

●二〇一三年十一月、父櫻井昇兄が出血性脳梗塞で入院。リハビリ病院への転院も含め、約一年間の入院となる。

●二〇一四年五月、父が院長をつとめていた櫻井医院を閉院。診療所を売却。

その間、なぜか私の心の中に次のみことばがずっとありました。

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

（マタイ　6・33～34）

父が入院していた二〇一四年は特に大変でした。自分の家の家事に加え、認知症の母が一人で住む実家の家事や食事の用意をする必要がありました。また、放っておくとリハビリをすぐに休んでしまう父の

入院先には、妹と交代でほぼ毎日通いました。それに加え、介護認定の申請、ケアマネージャーさんとの契約、デイサービス施設等の見学と契約、実家のリフォーム、父の診療所の片付けや医療廃棄物の処理、カルテなどの焼却処理、抵当権の抹消や法務局への届け出、不動産の売却、確定申告などなど、それまで経験のない仕事が大量に舞い込んできました。

思い出すだけで、どのように時間をやり繰りしていたのか不思議なほどです。一つ年下の妹、古田繭子姉妹とほぼ毎日連絡を取り合い、連携し、分担し合いました。家族にも協力してもらいました。毎日どうするべきか、今日、今、何をすべきか、イエス様に訊ねるつぶやきのような、祈りとも言えない祈りを常にしていました。時には、文句のような祈りになることもしばしばでした。しかしながら、いつも感じていたのは、主のご臨在でした。他の人から見れば、ただの偶然やラッキーに映るような出来事かもしれませんが、主は絶妙なタイミングで事を進ませてくださるのが分かりました。その度に本当に嬉しくなり、主に感謝する毎日でした。作業の一つひとつをすべて主が最善に導いてくださっていました。その一つひとつにあたかも天使の働きを見るような思いがしました。

天使の働きとは、時として、法務局の待っている順番によって決まる担当者であったり、業者さんからかかってくる電話のタイミングであったり、遅くなってしまった私の代わりにたまたま早く来てくれていた妹だったり、何の気なしに実家に立ち寄った時に回ってきた町内会の回覧板であったり、そんな些細なことですが、主のなさることは細やかであり、完璧であり、私たちにいつもとても優しいのです。

また、死ぬまで現役の医師を続けたいと頑固に言い続けていた父の心を、いつの間にか180度変えてくださったことには驚きました。父が倒れる前には、足腰が弱っている父に対して、家族は閉院を勧め、長い間

その最善の時がいつなのかを祈り求めていました。しかし、入院後は父にリハビリなどのモチベーションが下がらないように、その件に関しては口を閉ざして、祈りだけを密かに続けていました。すると、ある日、父は自分からその話しを始め、辞めることを決心していました。主が働いてくださったことに家族で感謝しました。

まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。（詩篇　91・11）

主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦労は何もそれに加えない。（箴言　10・22）

○最善のご計画

母は若かった頃は、物事をきちんとしていないと落ち着かない性格でした。服装も身だしなみにも気を使う人でした。そして毎日、ダイニングテーブルで聖書を開き、時間も忘れて読みふけったり、綺麗な字で丁寧にメモをとったり、集会のテープを聴いたり、熱心に主を求めている人でした。母は愛する身近な方々に、よく手紙を書き、集会の本やテープを送ったりもしていました。家族に対しても周りの方々に対してもとても愛情深い人でした。私がまだ学生だった時に母からもらった手紙の中には、「志保ちゃんが家に帰ってくると大輪のバラが咲いたようで、繭ちゃんが帰ってくるとスイートピーの束が投げ入れられたようです」と表現してくれました。

認知症が発症して以来、少しずつですが確実に症状は進み、今では身だしなみを整えることも、聖書を読むことも、手紙を書くこともできなくなっています。聖書と聖歌の区別さえつかず、洋服もまともに着ることもできません。

最初の頃は、それが私には受け入れ難く、「できない母」に対してイライラしたり、「なんでこれができないの?」と声を荒げたりしました。周りの者がイライラしてしまうと母はとても不安に陥り、ますますおかしな行動をとるようになってしまいます。私は十分自覚していたつもりでしたが、自分の中に愛がないということ、どこまでも自己中心的であることをいやと言うほど知らせられ、悔い改めに導かれました。

また、「できない母」を見ていると、情けない惨めな思いが私を支配し、涙が溢れることもありました。色々なことができなくなってしまい、私の知っている母、みんなの知っている道子さんは失われてしまったように思いました。なぜ主はご自身の愛する道子姉にこんなひどいことをされるのか、不満でいっぱいになりました。このような状態で生きていくことは、もしかすると、母自身の尊厳を傷つけることになるのではないかとも思うようになりました。しかし、その思いは、私のとんでもない思い上がりであると示されました。

「できない母」と思っていましたが、それは主が許されたというか、むしろ積極的に計画された母の人生における最善であり、母はそのご計画の中で、愛され、護られ、生かされているということに気づかされました。主は常に最善を成してくださるという最も基本的な約束を見失っていました。「できる」「できない」はどうでもいいことでした。認知症が母自身を損なうことは何一つないのです。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・28）

わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。

（2コリント　12・9）

胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

（イザヤ　46・3〜4）

ここ数年間、心の中にあるみことばの「神の国とその義を求める」とは、具体的にどうすればいいのかよく分かっていませんが、日々祈り求めつつ、導かれるままこれからも喜んで歩んでゆきたいと思います。

小森志保（旧姓：櫻井）
立教女学院高等学校卒、立教大学英米文学科卒
夫：良隆（よしたか）、長男：直人（なおと）、次男：謙人（けんと）

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15 〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33 〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ　―私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は、生きておられる
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第44号

定価100円（税込み）2017年4月15日初版

編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子　黒澤環
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

